

経済学部中国語教育に関する一考察（六） —中国語リスニングを中心に—

竹 中 佐英子

1. テーマ選定理由

筆者は東洋大学経済学部国際経済学科（以下「国経」）において、1年生選択必修科目「中国語Ⅰ（文法）」（以下「中Ⅰ文」）、2年生選択必修科目「中国語Ⅱ（文法）」（以下「中Ⅱ文」）を担当し、これらの科目の履修者が中国語検定試験（以下「中検」）に合格できるような授業を行っている。中検とは、1980年代～日本中国語検定協会が主催している、中国語の能力を測る試験である。最低レベルの準4級は大学の初習外国語第一年度半期終了、その1つ上のレベルの4級は第一年度全部終了、さらにその1つ上のレベルの3級は第二年度全部終了で対応することができる、とされている。幅広い教養を身に付けるべき大学教育において、特定の試験の合格を目指させる教育法には反対意見もあるが、それでも筆者が履修者に中検受験を勧めているのには2つの理由がある。1つは履修者の学習意欲を維持するためである。国経の中国語履修者には学んだ中国語を使う場がほとんど無く、単位取得のためだけに漫然と授業を受け、何も身に付かぬまま2年間の学習が終わってしまう、という履修者も少なくない。このような状況の下、たとえ最低レベルの準4級にでも合格すれば、学習成果を実感することができ、さらに上のレベルを目指して勉強しよう、という意欲が湧いて来る。もう1つの理由は就活の武器を作るためである。中国へ進出している日本企業には、中検合格者を積極的に採用するところも少なくない。非中国語専攻の学生が中検3級に合格していれば、エントリーシートの選考を通過して面接に進める確率も高くなる。経済学部では数年前、初習外国語検定試験受験者に検定料を補助する制度ができた。制度実施後、中検の受験者、合格者は年々増え、学習態度も「卒業要件さえ満たせば良い」という消極的なものから、授業開始15分前にはもう着席して、配布した練習問題を解き始めるという、積極的で真剣なものへと変わり、良好な学習環境が形成されている。

国経の中国語履修者が合格を目指すことのできるレベルの中検準4級、4級、3級は、リスニング試験と筆記試験から構成される。このうち、4級と3級のリスニング試験は約30分間、100点満

点で（出題の詳細は竹中 2015. p304～306参照）、4級には60点、3級には65点という「合格最低点」が設けられ、これを下回ると、筆記試験がいくら高得点であっても不合格になってしまう。中Ⅱ文の履修者の中には、4級筆記試験の得点率が8割の高きに達したものの、リスニング試験の得点率が4割に留まり、不合格となった学生もいる（詳細は竹中 2015. p308参照）。原因は主に、筆者が授業でリスニング試験の指導をあまり行っていないことにある。外国語を聞いて理解するには、一定量の語彙や文型を覚えておく必要があるのだが、中Ⅰ文、中Ⅱ文の授業時間数は週1こまに限られており、授業は中検頻出の語彙や文型を教えることに多くの時間を割かざるを得ない。リスニング試験の指導不足を補うため、筆者はかつて、リスニング問題に登場する単語一覧表を見ながら解答する、というリスニング試験の課外指導を行った。しかし、第83回中検4級リスニング試験では、課外指導を受講した学生グループの平均点が受講しなかった学生グループの平均点を5.56点も下回るといふ、大変不本意な結果が出ている（指導法および結果の詳細は竹中 2015. p306～310参照）。

そこで本稿では2つのテーマを考察する。1つ目は、中国語のリスニング能力を育成する教育法である。筆者はこのほど中Ⅱ文であるリスニング教育を行ったが、その教育法が中検リスニング試験を解くのに役立ったか否か、を検証する。2つ目は、日本人学習者の中国語リスニングの困難点の探求である。これは筆者が中Ⅱ文履修者を対象に行ったリスニング試験の結果を分析し、日本人学習者が中国語リスニングのどのような点でつまづいているかを明らかにするものである。

2. 聴写教育法の考察

本章では1つ目のテーマ、中国語のリスニング能力を育成する教育法を考察する。

外国語のリスニング能力を育成する教育法の1つに、音を聞いてそれを文字化する「リスニング・ディクテーション」というものがある。加藤 2005. は英語のリスニング・ディクテーション過程について、「音声上、主語に複数形の-sが聞き取れなくても、動詞の形が複数と呼応している場合には-sを付加するなどの修正作業が行われる。また、文脈上、否定文でなければならない場合には、たとえ-n'tが聞き取れていなくても、挿入するというような操作が行われる。」と描写し、「ディクテーションでは単に音声英語を聞き取るだけではなく、意味を認知し、単語のスペリングを再生し、英文法の知識を動員して統語を行い、少しでも意味が通るような文を産出して書き出さなければならない」ことから、「聴解だけでなく、読解や総合といった他の英語力の訓練法としても有用である」と指摘している。筆者はかつて、リスニング問題に登場する単語一覧表を見ながら解答する、という指導を行ったが、それではリスニング能力が向上しなかったことから（詳細は竹中 2015. p306～310参照）、中国語リスニング能力の育成、および中検リスニング試験対策のため、リスニング・ディクテーション（以下、中国語の言い方「聴写」とする）という指導法を実践した。以下、聴写教育の実践報告とその教育結果を紹介する。

2.1. 聴写教育法紹介

本節では聴写教育法を紹介する。

日本人中国語学習者のリスニング能力を育成するため、筆者は2016年春学期、中Ⅱ文履修者に対し、過去に出題された中検4級リスニング試験問題（以下「過去問」）を聞いて書き取る「聴写」宿題を課した。毎週、中検4級リスニング試験過去問から1題を選び、その音声を toyo-net-ace コンテンツに掲載する。履修者には過去問を書き取る用紙（資料1）と、過去問に登場する単語の一覧表（資料2）を配布する。

【資料1】 聴写宿題用紙

問. 「第88回長文聴解2-6~10」を聞き、空欄に当てはまる中国語を、簡体字で書き入れ、日本語に訳しなさい。□には1文字が入ります。

她□□□□□□□□□□□□□□□□□□。

日本語訳：_____。

【資料2】 単語一覧表

ピンイン	簡体字	日本漢字	(品詞) 意味
1 yào	要		(助動) …したい 【注】強い願望を表す
2 xiàng	向		(介) …へ向けて；…に対して
3 jièshào	介绍	紹	(動) 紹介する
4 niánqīng	年轻	軽	(形) 若い
5 chuān	穿	穿	(動) 着る；(ズボン、靴を) 履く
6 yīfu	衣服		(名) 服；衣類

書き取る用紙（資料1）には四角い「□」を書いておく（ただし、問題を解く上で聞き取れなくても構わないような箇所は、あらかじめ簡体字を書いておく）。履修者は単語一覧表（資料2）を手掛かりに、 toyo-net-ace コンテンツに掲載された中国語の音声を聞き、1ますにつき1簡体字を書き込み、全文を日本語に訳し（資料3）、翌週提出する。筆者が添削し、履修者には再び toyo-net-ace を聞いて、聞き間違えた箇所の音声と簡体字を復習するよう、指導する。

【資料3】 聴写宿題、学生の解答例

她要向中国人介绍日本年轻人穿的衣服。

日本語訳：彼女は中国人へ向けて日本人の若者が来ている服を紹介しがっています。

2.2. 聴写教育の結果

本節では聴写教育の結果を報告する。

筆者は2016年春学期、中Ⅱ文履修者に対して毎週、聴写宿題を課し（第2章第1節参照）、中国語リスニング能力を訓練した。聴写宿題を10回課したところで第89回中検が行われ（2016年6月実施）、中Ⅱ文履修者22人のうち15人が4級を受験した。以下、聴写宿題を解いた履修者（2016年度春学期中Ⅱ文履修者）と解いていない履修者（2015年度春学期中Ⅱ文履修者）の、中検4級リスニング試験の成績を比較し、聴写が中国語リスニング能力の育成に効果があるか否か、を考察する。

表1、2は、聴写宿題を解いた履修者と解いていない履修者の中検4級の成績を示したものである。なお、中検は実施する回によって難易度や合格率に差があり、4級合格率は40～70%まで、かなり幅がある。

まず、聴写宿題を解いた履修者が受験した第89回中検と、解いていない履修者が受験した第86回中検の、4級全国受験者の合格率を比較すると、前者は後者を10.5%下回り、聴写宿題を解いた履修者が受験した中検4級（第89回）の方が難易度が高いと言える。よって、聴写宿題を解いていな

表1. 聴写宿題を解いた履修者の中検4級リスニング試験成績（第89回中検を受験）

第89回中検4級	中Ⅱ文履修者	全国受験者	中Ⅱ文一全国
受験者数	15人	2,459人	
合格者数	12人	1,170人	
合格率	80%	47.6%	+32.4%
リスニング平均点	69.83点	62.3点	+7.53点
筆記平均点	77.94点	64.0点	+13.94点

表2. 聴写宿題を解いていない履修者の中検4級リスニング試験成績（第86回中検を受験）

第86回中検4級	中Ⅱ文履修者	全国受験者	中Ⅱ文一全国
受験者数	17人	2,204人	
合格者数	14人	1,281人	
合格率	82.35%	58.1%	+24.48%
リスニング平均点	71.76点	68.5点	+3.26点
筆記平均点	74点	67.2点	+6.8点

履修者のリスニング平均点は解いた履修者を1.93点上回ってはいるが、試験の難易度を鑑みるに、ここではまだ、聴写宿題の教育効果を判断することはできない。

次に、中Ⅱ文履修者と全国受験者の中検4級リスニング平均点を比較する。中Ⅱ文履修者で、聴写宿題を解いた履修者の平均点（69.83点）は全国受験者（62.3点）を7.53点上回っているのに対し、解いていない履修者の平均点（71.76点）は全国受験者（68.5点）を3.26点上回っており、前者は後者を2.3倍上回っている。さらに、前者が受験した第89回中検4級リスニング全国平均点（62.3点）は後者が受験した第86回（68.5点）を6.2点下回っている。すなわち前者のリスニング試験の方が後者よりも難易度が高いことを考慮に入れると、聴写宿題を解いた履修者の方が解いていない履修者よりも、リスニング試験でしっかりと得点を取れたことが分かる。

さらに、筆記試験の平均点にも注目したい。筆者の授業は一貫して、中検筆記試験で得点を取れる指導を心掛けてきたので、聴写宿題を解いていない履修者の筆記平均点（74点）でも全国受験者（67.2点）を6.8点上回っており、筆記の指導はすでに一定の功を奏している。しかし、聴写宿題を解いた履修者の筆記平均点（77.94点）は全国受験者（64点）を13.94点上回っており、その上回り方には2倍以上の差がある。筆記試験の指導方法は全く変わらず、聴写宿題を加えたことで、語彙や文法の学習にもプラス効果をもたらしたのである。この教育結果は、加藤 2005.の「聴写は聴解だけでなく、読解や総合といった他の英語力の訓練法としても有用である」という先行研究の指摘を補強するものである（第2章冒頭参照）。

3. 日本人学習者の中国語リスニングの困難点の考察

本章では2つ目のテーマ、日本人学習者の中国語リスニングの困難点を探求する。

3.1. 聴写試験紹介

中Ⅱ文履修者で中検4級を受験した者のうち、第89回、第86回の不合格者はそれぞれ3人ずつ、いずれも筆記試験は7～8割得点できたものの、筆記試験が合格最低点（60点）を超えなかったことによる不合格であった。そこで、筆者は2016年春学期、中Ⅱ文履修者に対して毎週、聴写宿題を課し（第2章第1節参照）、中国語リスニング能力を訓練した後、定期試験で聴写宿題を若干変えて出題し、その誤答から日本人学習者の中国語リスニングの困難点を探ることとした。資料4は、聴写宿題を13回課した後に行った、定期試験の聴写問題、表3は同試験を受験した履修者（22人）の内訳である。

【資料4】 聴写問題（2016年7月実施）

問. 中国語の文を聞き、簡体字で書き取りなさい。一文につき3回ずつ読む。1回目は普通のスピー

ド、2回目は単語ごとに区切って、3回目はやや遅めのスピードで、読む。

問1. 他要向中国人介绍日本电影。(12文字)

問2. 那里可以看到年轻人穿的衣服。(13文字)

問3. 我们在一起只能说日语。(10文字)

問4. 他们班没有留学生。(8文字)

表3. 聴写問題受験者内訳 (2016年7月実施。第89回中検は2016年6月実施)

略称	グループ名	人数	平均点 (43点満点)
j4合	第89回中検準4級合格者	1人	33点
4不	第89回中検4級不合格者	4人	38.5点
4合	第89回中検4級合格者	12人	38.75点
未	第89回中検未受験者	5人	37.8点

表3を見るに、聴写問題の平均点が最も高いグループは第89回中検4級合格者、次いで4級不合格者、未受験者、準4級合格者の順で、合格した級のレベルが高いほど聴写問題の成績も良い、という相関関係が見て取れる。未受験者の平均点が準4級合格者を上回ったのは、準4級や4級に合格できる能力を持ちながら、受験しなかった履修者がいるためである。

3.2. 聴写試験結果紹介

本節では聴写試験の結果を紹介する。

表4は、聴写試験(資料4)に出題した簡体字43文字中、正解率が100%ではなかった簡体字20文字を、正解率が低い順に並べて示したものである。表4の見方を説明する。最も間違いが多かったのは“向”で、正解者は受験者22人中4人(正解率18.18%)、正解者の内訳は、中検準4級合格者が0人、4級不合格者に1人、4級合格者に2人、中検未受験者に1人いる、ということである。

表5～16は、聴写試験(資料4)で、正解率が100%ではなかった簡体字20文字の正答、誤答状況を、簡体字毎に示したものである。表5～16の見方を表6を例に説明する。“轻”の正解者は6人(正解率27.27%)、正解者の内訳は、中検準4級合格者が0人、4級不合格者に1人、4級合格者に3人、中検未受験者に2人いる。不正解“级”は正解“轻”と子音(「子」と表記)、母音(「母」と表記)、声調(「声」と表記)が異なっている、“车+车”はそのような簡体字が存在しない、すなわち誤った簡体字である(「簡」と表記)、“车”は存在する簡体字ではあるが、正解“轻”とは意味上関連のない、すなわち誤った単語を書いた(「語」と表記)、ということである。

表 4. 聴写不正解一覧

不正解率		正解合計 (22)	j4合 (1)	4不 (4)	4合 (12)	未 (5)
第1位	向	4人 (18.18%)	0人 (0%)	1人 (25%)	2人 (16.67%)	1人 (20%)
第2位	(年) 轻	6人 (27.27%)	0人 (0%)	1人 (25%)	3人 (25%)	2人 (40%)
第3位	只	7人 (31.81%)	0人 (0%)	1人 (25%)	4人 (33.33%)	2人 (40%)
第4位	能	11人 (50%)	0人 (0%)	2人 (50%)	7人 (58.33%)	2人 (40%)
第5位	介 (绍)	17人 (77.27%)	0人 (0%)	2人 (50%)	11人 (91.67%)	4人 (80%)
第6位	(介) 绍	18人 (81.81%)	1人 (100%)	2人 (50%)	11人 (91.67%)	4人 (80%)
第6位	(一) 起	18人 (81.81%)	0人 (0%)	4人 (100%)	12人 (100%)	2人 (40%)
第6位	(日) 语	18人 (81.81%)	1人 (100%)	4人 (100%)	9人 (75%)	4人 (80%)
第9位	年 (轻)	19人 (86.36%)	0人 (0%)	4人 (100%)	11人 (91.67%)	4人 (80%)
第9位	穿	19人 (86.36%)	1人 (100%)	3人 (75%)	11人 (91.67%)	4人 (80%)
第9位	且 (语)	19人 (86.36%)	1人 (100%)	4人 (100%)	10人 (83.33%)	4人 (80%)
第12位	且 (本)	20人 (90.9%)	0人 (1%)	4人 (100%)	11人 (91.67%)	5人 (100%)
第12位	那	20人 (90.9%)	0人 (0%)	4人 (100%)	12人 (100%)	4人 (80%)
第12位	到	20人 (90.9%)	1人 (100%)	3人 (75%)	12人 (100%)	4人 (80%)
第12位	在	20人 (90.9%)	1人 (100%)	4人 (100%)	11人 (91.67%)	4人 (80%)
第12位	说	20人 (90.9%)	1人 (100%)	4人 (100%)	10人 (83.33%)	5人 (100%)
第12位	班	20人 (90.9%)	0人 (100%)	4人 (100%)	11人 (91.67%)	5人 (100%)
第18位	衣 (服)	21人 (95.45%)	1人 (100%)	4人 (100%)	11人 (91.67%)	5人 (100%)
第18位	(衣) 服	21人 (95.45%)	1人 (100%)	4人 (100%)	11人 (91.67%)	5人 (100%)
第18位	留	21人 (95.45%)	1人 (100%)	3人 (75%)	12人 (100%)	5人 (100%)

表 5. “向”不正解解答状況

	要因	合計 (22)	j4合 (1)	4不 (4)	4合 (12)	未 (5)
向		4人 (18.18%)	0人 (0%)	1人 (25%)	2人 (16.67%)	1人 (20%)
想	声	16人 (72.72%)	1人 (100%)	3人 (75%)	9人 (75%)	3人 (60%)
喜欢	語	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (20%)
無回答		1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)

表 6. “轻”不正解解答状況

	要因	合計 (22)	j4合 (1)	4不 (4)	4合 (12)	未 (5)
(年) 轻		6人 (27.27%)	0人 (0%)	1人 (25%)	3人 (25%)	2人 (40%)
無回答		4人 (18.18%)	1人 (100%)	1人 (25%)	1人 (8.33%)	1人 (20%)
前	母/声	2人 (9%)	0人 (0%)	1人 (25%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
车+车	簡	2人 (9%)	0人 (0%)	0人 (0%)	2人 (16.67%)	0人 (0%)
请	声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
级	子/母/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (20%)
纪	子/母/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
近	子/母/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	1人 (25%)	0人 (0%)	0人 (0%)
较	子/母/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
若	語	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
东+圣	簡	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
车	語	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (20%)

表7. “只”不正解解答状况

	要因	合計 (22)	j4合 (1)	4不 (4)	4合 (12)	未 (5)
只		7人 (31.81%)	0人 (0%)	1人 (25%)	4人 (33.33%)	2人 (40%)
無回答		6人 (27.27%)	1人 (100%)	0人 (0%)	5人 (41.67%)	0人 (0%)
几	子	3人 (13.63%)	0人 (0%)	2人 (50%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
住	声/母	2人 (9%)	0人 (0%)	0人 (0%)	2人 (16.67%)	0人 (0%)
就	子/母/声	2人 (9%)	0人 (0%)	1人 (25%)	0人 (0%)	1人 (20%)
机	子/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (20%)
去	子/母/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (20%)

表8. “能”不正解解答状况

	要因	合計 (22)	j4合 (1)	4不 (4)	4合 (12)	未 (5)
能		11人 (50%)	0人 (0%)	2人 (50%)	7人 (58.33%)	2人 (40%)
难	母	10人 (45.45%)	1人 (100%)	2人 (50%)	4人 (33.33%)	3人 (60%)
無回答		1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)

表9. “介”不正解解答状况

	要因	合計 (22)	j4合 (1)	4不 (4)	4合 (12)	未 (5)
介 (绍)		17人 (77.27%)	0人 (0%)	2人 (50%)	11人 (91.67%)	4人 (80%)
無回答		4人 (18.18%)	1人 (100%)	1人 (25%)	1人 (8.33%)	1人 (20%)
这	子/母	1人 (4.54%)	0人 (0%)	1人 (25%)	0人 (0%)	0人 (0%)

表10. “绍”不正解解答状况

	要因	合計 (22)	j4合 (1)	4不 (4)	4合 (12)	未 (5)
(介) 绍		18人 (81.81%)	1人 (100%)	2人 (50%)	11人 (91.67%)	4人 (80%)
小	子/母/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	1人 (25%)	0人 (0%)	0人 (0%)
無回答		2人 (9%)	0人 (0%)	1人 (25%)	1人 (8.33%)	1人 (20%)

表11. “起”不正解解答状况

	要因	合計 (22)	j4合 (1)	4不 (4)	4合 (12)	未 (5)
(一) 起		18人 (81.81%)	0人 (0%)	4人 (100%)	12人 (100%)	2人 (40%)
次	子/声	2人 (9%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	2人 (40%)
直	子/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (20%)
無回答		1人 (4.54%)	1人 (100%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)

表12. “语”不正解解答状况

	要因	合計 (22)	j4合 (1)	4不 (4)	4合 (12)	未 (5)
(日) 语		18人 (81.81%)	1人 (100%)	4人 (100%)	9人 (75%)	4人 (80%)
物	母/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)

音	母/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (20%)
本	子/母	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
無回答		1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)

表13. “年”不正解答状況

	要因	合計 (22)	j 4 合 (1)	4 不 (4)	4 合 (12)	未 (5)
年 (轻)		19人 (86.36%)	0人 (0%)	4人 (100%)	11人 (91.67%)	4人 (80%)
無回答		3人 (13.63%)	1人 (100%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	1人 (20%)

表14. “穿”不正解答状況

	要因	合計 (22)	j 4 合 (1)	4 不 (4)	4 合 (12)	未 (5)
穿		19人 (86.36%)	1人 (100%)	3人 (75%)	11人 (91.67%)	4人 (80%)
川	簡	1人 (4.54%)	0人 (0%)	1人 (25%)	0人 (0%)	0人 (0%)
無回答		2人 (9%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	1人 (20%)

表15. “日 (语)”不正解答状況

	要因	合計 (22)	j 4 合 (1)	4 不 (4)	4 合 (12)	未 (5)
日 (语)		19人 (86.36%)	1人 (100%)	4人 (100%)	10人 (83.33%)	4人 (80%)
礼	子/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
录	子/母	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (20%)
無回答		1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)

表16. “日 (本)”不正解答状況

	要因	合計 (22)	j 4 合 (1)	4 不 (4)	4 合 (12)	未 (5)
日 (本)		20人 (90.9%)	0人 (0%)	4人 (100%)	11人 (91.67%)	5人 (100%)
一	子/声	1人 (4.54%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (8.33%)	0人 (0%)
無回答		1人 (4.54%)	1人 (100%)	0人 (100%)	0人 (0%)	0人 (0%)

3.3. 聴写試験解答分析

本節では、聴写試験の解答状況を分析することを通じて、日本人の中国語リスニングの困難点を探求する。

表17～19は、聴写試験（資料4）で、正解率が100%ではなかった簡体字20文字をピンイン（中国語の音声を表すローマ字表記）で表記した場合、間違った簡体字のピンイン表記とどの部分が異なっているかを示したものである。表17～19の見方を表17を例に説明する。正解“只”の子音は卷舌無気音“zh”であるが、その不正解として子音が舌面無気音“j”である簡体字の誤答が“几 ji”“就 jiù”“机 ji”の3例ある、ということである。

3.3.1. 子音聞き取り間違い

本節では、子音の聞き取りを間違った原因を考察する。

表17. 子音聞き取り間違い

卷舌無気音“zh”→舌面無気音“j” (4例、計27.17%)	“只”→“几”(13.63%)、“只”→“就”(9%)、“只”→“机”(4.54%)
舌面有気音“q”→舌面無気音“j” (4例、計18.16%)	“轻”→“级”(4.54%)、“轻”→“纪”(4.54%)、“轻”→“近”(4.54%)、 “轻”→“较”(4.54%)
卷舌音“r”→舌尖音“l” (2例、計9.08%)	“日”→“礼”(4.54%)、“日”→“录”(4.54%)
舌面有気音“q”→舌尖有気音“c”	“起”→“次”(9%)
卷舌無気音“zh”→舌面有気音“q”	“只”→“去”(4.54%)
卷舌音“sh”→舌面音“x”	“绍”→“小”(4.54%)
卷舌音“r”→無子音	“日”→“一”(4.54%)
舌面無気音“j”→卷舌無気音“zh”	“介”→“这”(4.54%)
舌面有気音“q”→卷舌無気音“zh”	“起”→“直”(4.54%)
無子音→両唇音“b”	“语”→“本”(4.54%)

表17を見るに、子音聞き取りの誤答で、最も多いのは卷舌無気音“zh”を舌面無気音“j”(4例、計27.17%)、次に舌面有気音“q”を舌面無気音“j”(4例、計18.16%)、さらに卷舌音“r”を舌尖音“l”(2例、計9.08%)、舌面有気音“q”を舌尖有気音“c”(1例、9%)に聞き間違えたものである。これら以外の誤答はそれぞれ1例ずつで、卷舌音“zh”“sh”“r”を舌面音“q”“x”“無子音”、舌面音“j”“q”を卷舌音“zh”に聞き間違えたものである。これらの誤答から、日本人の中国語子音聞き取りの困難点は主に、卷舌音と有気音にあると言える。

まず、卷舌音聞き取りの誤答を考察する。卷舌音を舌面音、舌尖音、無子音に聞き間違えた誤答は計9例あるのに対し、舌面音を卷舌音に聞き間違えた誤答は2例に留まり、履修者にとっては卷舌音の方が聞き取れていないことが分かる。日本語の子音には舌尖を硬口蓋に向けて反り上げる卷舌音、または卷舌音に比較的近く聞こえる舌頂音(coronal consonant、英語の“change”“ship”など)が存在しないため、日本人は卷舌音に耳慣れていない。李明・石佩雯 1986. (p52)は、「日本語の子音は舌面が硬口蓋に向かって近づく口蓋化(palatalization)が起りやすく、日本人は卷舌音“zh、ch、sh”を舌面音“j、q、x”に発音しがちである。」と分析している。日本人が卷舌音の聞き取りが困難である理由は、卷舌音を日本語子音の舌面音として認識してしまうことにある、と言える。

次に、有気音聞き取りの誤答を見てみる。有気音を無気音に聞き間違えた誤答は5例あるのに対し、無気音を有気音に聞き間違えた誤答は1例しかない。吴宗济 1992. (p64)の実験音声学の結

果によると、塞擦有気音“q”が発音されてから後続する母音が始まる迄の間に挟まれる気流の長さは140ミリ秒であるのに対し、塞擦無気音“j”“zh”と母音の間の気流の長さは70ミリ秒である。つまり、有気音の気流の長さは無気音の2倍あり、有気音は無気音より長く聞こえるのである。気流の長さの明らかな違いにより、無気音を有気音に聞き間違えた誤答は、有気音を無気音に聞き間違えた誤答の5分の1に留まった、と考えられる。

3.3.2. 母音聞き取り間違い

本節では、母音の聞き取りを間違った原因を考察する。

表18. 母音聞き取り間違い

後鼻母音“eng”→前鼻母音“an”	“能”→“难”（45.45%）
後鼻母音“ing”→前母音“i”	“轻”→“级”（4.54%）、“轻”→“纪”（4.54%）
後鼻母音“ing”→前鼻母音“ian”	“轻”→“前”（9%）
後鼻母音“ing”→前鼻母音“in”	“轻”→“近”（4.54%）
後鼻母音“ing”→三重母音“jiao”	“轻”→“较”（4.54%）
卷舌音後母音“i”→単母音“u”	“只”→“住”（9%）、“日”→“录”（4.54%）
卷舌音後母音“i”→単母音“ü”	“只”→“去”（4.54%）
卷舌音後母音“i”→三重母音“iou”	“只”→“就”（9%）
単母音“ü”→単母音“u”	“语”→“物”（4.54%）
単母音“ü”→前鼻母音“in”	“语”→“音”（4.54%）
単母音“ü”→前鼻母音“en”	“语”→“本”（4.54%）
二重母音“ie”→単母音“e”	“介”→“这”（4.54%）
二重母音“ao”→三重母音“iao”	“绍”→“小”（4.54%）

表18を見るに、母音聞き取りの誤答で、最も多いのは後鼻母音“eng”を前鼻母音“an”（1例、45.45%）、次に後鼻母音“ing”を単母音“i”、前鼻母音“ian”“in”、三重母音“iao”（計5例、計27.16%）、さらに卷舌音の後ろにのみ現われる母音“i”を単母音“u”“ü”、三重母音“iou”（計4例、計27.08%）、単母音“ü”を単母音“u”、前鼻母音“in”“en”（計3例、計13.62%）に聞き間違えたものである。これら以外の誤答はそれぞれ1例ずつで、二重母音“ie”を単母音“e”、二重母音“ao”を三重母音“iao”に聞き間違えたものである。これらの誤答から、日本人の中国語母音聞き取りの困難点は主に、後鼻母音“eng”“ing”、卷舌音後ろの母音“i”、単母音“ü”にあることが分かる。

まず、後鼻母音聞き取りの誤答を考察する。後鼻母音を前鼻母音に聞き間違えた誤答は計3例（58.99%）あるのに対し、前鼻母音を聞き間違えた誤答は無く、履修者にとっては後鼻母音が聞き取れていないことが分かる。実は日本語には前鼻母音と後鼻母音の両方が存在する。例えば、「案

内]の「アン」は前鼻母音“an”、「案内」の「アン」は後鼻母音“ang”であるが、日本語では“an”と“ang”を同じ音素に分類している。しかし、吳宗済 1992. (p125) の指摘によると、「日本語の鼻母音の舌の位置は環境によって変わるため、日本人はしばしば中国語の後鼻母音を前よりに発音しがちで、“ng”と“n”の間ぐらいの音に聞こえる。」という。さらに吳宗済 1989. (p124) の音声学実験によると、「鼻母音の末尾は必ずしも中国語共通語鼻母音に絶対必要な特徴ではなく、状況によっては往々にして脱落して発音されることもある。特に、1音節が短く発音された時と、声調が第4声の時は、鼻母音の末尾は脱落しやすい。」という結果が出ている。吳宗済の研究成果を用いて解釈すると、日本人が後鼻母音の聞き取りが困難である理由は、日本人が後鼻母音を前鼻母音のように発音しがちであることと、中国語鼻母音の末尾そのものが脱落して発音されていないことも多々ある、という2点にあると言えるだろう。

次に、卷舌音後ろの母音“i”の聞き取りの誤答を考察する。この音は“i”と表記されるが、他の子音の後ろに現われる“i”のように唇を思いきり横に引いて「イー」と発音するのではない。吳宗済 1989. (p90) はこの音の発音方法を、「唇の形はやや横に広がるが、舌先は反り上がって、上の歯の裏との間が狭まる。」と解説している。この発音方法だと、日本人には日本語の母音“ウ”や、唇がやや丸くなる中国語の単母音“ü”のように聞こえる。表18を見るに、卷舌音後母音“i”を単母音“u”に聞き間違えた誤答は計2例(13.54%)、単母音“ü”、三重母音“iou”に聞き間違えた例はそれぞれ1例である。吳宗済の解説を用いて解釈すると、日本人が卷舌音後母音を単母音“u”“ü”、“u”を含む三重母音“iou”に聞き間違えたのは、卷舌音後母音“i”の発音方法が単母音“u”“ü”に似ているからだと考えられる。

最後に、単母音“ü”聞き取りの誤答を考察する。吳宗済 1992. (p89) は単母音“ü”の発音方法を、「舌の位置は単母音“i”と同じで、前方に寄って高くなる。唇の形は単母音“u”をやや緩めたぐらいにして、丸めて突き出す。」と解説している。吳宗済の解説から、単母音“ü”を単母音“u”や前鼻母音“in”に聞き間違えたのは、“u”や“in”を発音する時の舌の位置や唇の形と共通点があるため、聞き分けも混同しやすいからだと考えられる。

3.3.3. 声調聞き取り間違い

本節では、声調の聞き取りを間違った原因を考察する。

表19を見るに、声調聞き取りの誤答で、最も多いのは第4声を第3声(計3例、81.8%)、次に第1声を第4声(計3例、13.62%)、第3声を第4声(計3例、13.54%)、さらに第3声を第1声(計2例、9.08%)に聞き間違えたものである。これら以外の誤答はそれぞれ1例ずつで、第1声を第2声、第1声を第3声、第3声を第2声に聞き間違えたものである。表19では、日本人の中国語声調聞き取りでは、第4声の誤答が多く、第2声の誤答が少ない。しかし、馮丽萍1997. (p607) が

表19. 声調間違い

第4声→第3声	“向”→“想”（72.72%）、“绍”→“小”（4.54%）、“日”→“礼”（4.54%）
第1声→第4声	“轻”→“纪”（4.54%）、“轻”→“近”（4.54%）、“轻”→“较”（4.54%）
第3声→第4声	“起”→“次”（9%）、“语”→“物”（4.54%）
第3声→第1声	“语”→“音”（4.54%）、“日”→“一”（4.54%）
第1声→第2声	“轻”→“级”（4.54%）
第1声→第3声	“轻”→“请”（4.54%）
第3声→第2声	“起”→“直”（4.54%）

日本人学生に対して行った、声調聞き取り試験の結果によると、最も聞き間違いが多かったのは第3声を第2声（76%）、次いで第1声を第2声（62%）、第2声を第3声（53%）、第4声を第2声（50%）に聞き間違えたもので、第2声の聞き間違いが多い、という逆の結果が出ている。ちなみに、表19で多かった誤答を冯丽萍1997.（p607）の試験結果で見ると、誤答率はそれぞれ、第4声を第3声が1例（12%）、第1声を第4声が4例（19%）、第3声を第4声が1例（4%）、第3声を第1声が5例（20%）で、いずれも誤答率は2割以下と高くはない。表19が先行研究と異なる結果を得たのは何故だろうか？原因は解答方式にあると考えられる。筆者は聞いた中国語を簡体字で書かせたのに対し、冯丽萍1997.の試験はピンインで書かせている。ピンインは子音、母音、声調符号を柔軟に組み合わせて解答することができる。よって、冯丽萍1997.の収集した誤答の中には中国語の音節に存在しない“siao”“jan”などという綴りさえ存在する。しかし、簡体字で書くには、仮に第4声を聞き取れていたとしても、第4声の簡体字が思い浮かばなければ、子音と母音は正しいが、声調の誤った簡体字を書くことになる。表19からは日本人の中国語声調聞き取り間違いの傾向を見出すことは難しいので、今後の中国語リスニング試験で、履修者の把握状況をより正確に反映する解答方法を熟慮し、再度調査を行いたいと考える。

3.3.4 簡体字、語の間違い

本節では、簡体字、語の間違いを考察する。

表20. 簡体字、語の間違い

簡体字間違い	“轻”→“车+车”（9%）、“轻”→“东+圣”（4.54%）、“穿”→“川”（4.54%）
語間違い	“轻”→“若”（4.54%）“轻”→“车”（4.54%）

表20を見るに、簡体字の間違いのうち、“轻”の簡体字“轻”の書き間違いが2例（計13.54%）、語の間違いでも、“轻”と書くべき簡体字を書けなかったのが2例（計9.08%）である。日本語は漢

字を用いる言語なので、日本人は非漢字圏の学習者に比べると、簡体字の書き間違いは圧倒的に少ない。しかし、“轻”の字形は複雑で、左側に“車”の簡体字、右側に“圣”とわずかに形の異なるものを書く。表20から、日本漢字とごくわずかな差がある簡体字は日本人学習者にとっても習得困難であることが分かる。

4. 分析結果、今後の研究課題

第2章では、中国語のリスニング能力を育成する教育法を、実践報告の分析に基づいて考察した。第3章では、聴写試験の解答状況の分析を通じ、日本人の中国語リスニングの困難点およびその原因を考察した。以上の考察により、以下のような分析結果と、今後の研究課題を得た。

- (1) 中国語の音を聞き、それを簡体字で書き取る聴写（リスニング・ディクテーション）は、中国語リスニング能力の育成に寄与するとともに、中国語の語彙や文法の理解に役立ち、知識の定着を促進することにもつながる。
- (2) 日本人の中国語子音聞き取りの困難点は主に、巻舌音と有気音にある。巻舌音が聞き取り困難な原因は、巻舌音と日本語子音の舌面音の混同にある。
- (3) 日本人の中国語母音聞き取りの困難点は主に、後鼻母音、巻舌音後母音“i”、単母音“ü”にある。日本人は後鼻母音を前鼻母音に発音しがちであり、また中国語鼻母音の末尾は発音されていないが多い。巻舌音後母音“i”や単母音“ü”は日本語にない発音であるため、日本人はそれに発音方法が似た音を当てて理解しようとする。
- (4) 日本人学習者にとって、日本漢字とごくわずかな差がある簡体字は習得困難である。
- (5) 今回の調査方法で、日本人の中国語声調聞き取り間違いの明確な傾向を見出すことができなかった。今後、中国語の音声を簡体字で書き取る聴写という以外の方法で調査を行い、再度検討したい。

【参考文献】

- 加藤雅之 2005. 「授業におけるディクテーションの効果的な活用法」、関西英語教育学会第9回研究大会（2005年9月）発表レジュメ、www.solac.kobe-u.ac.jp/~masakato/research/papers/20050604-KELES.pdf
- 竹中佐英子 2015. 「経済学部の中国語教育に関する一考察（四）」、『東洋大学経済論集』第40巻第2号、p303～315
- 冯丽萍 1997. <初級汉语水平英、日语学生语音误区的分布与比较>，《第五届国际汉语教学讨论会论文集》，北京大学出版社、p601～610
- 李明、石佩雯编著 1986. 《汉语普通话语音辩证》、北京语言文化大学出版社
- 吴宗济主编 1992. 《现代汉语语音概要》、华语教学出版社
- 吴宗济、林茂灿主编 1989. 《实验语音学概要 增订版》、北京大学出版社